

# 京鹿子

京鹿子  
三月号  
三月号

3月号

鈴鹿 呂仁

拾掬集 その九十



手招きの巫女へ媚ふる初がらす  
鞍馬路の小さき傾れに淑氣満つ  
七草の春を零して里ごころ  
聞き耳を立てる一年初卯かな  
火を紡ぐ寒の老木風を解く  
有事てふ奥の手黒し霜の国

歩の駒を万事に備ふ蝌蚪の群れ  
高層の都会の迷子蛇出づる  
亀鳴かす振れの位置の天の沙汰

吟行・平安神宮界隈

寒木の芽を包むくれなるの空  
待春の丹塗りの社際立てり  
寒禽に影をあづけて臥龍橋  
水鳥の水脈重ねては日を零す

俳句四季三月号

浮かれだす雲二つ三つ弥生山

—近詠—

和田 照海



細波ごころ

初日いま細波ごころ野風呂崎  
一羽来てつぎつぎ鴨の陣二つ  
白日の峰里挙げて成木責  
百幹の竹つややかに嵯峨の冬  
浜糶にちぢみきつたる赤海鼠

—近詠—

塩貝 朱千



真つ赤なりボン

爽籟や笙の音に似て二条離宮  
黒書院に言霊溜る城もみぢ  
二億年てふ樹木の裔や冬ぬくし  
あかときの茜に染まる空つ風  
行く年や真つ赤なりボンで結びませう

# 英華採集

綿虫や晩年といふ不定形

奈良 福嶋 正一

綿虫は体長約二ミリほどのアブラムシ科の昆虫。都会で余り見かけることがなく見たことのない人も多いらしいが綿虫の浮遊している様は、何とも神秘的で儂げである。さて、人は歳を重ねていくにつれ晩年という言葉に躍らせているようであり何時しか晩年を意識するようになる。しかし、晩年は確固としたものではなく曖昧である。掲句の中七下五の措辞は、言い得て妙で綿虫の実態と響き合う。

晩学のペン胼胼走る冬の雷

京都 塩見 かず子

期せずしてこちらの句は晩学を詠んでいる。俳句を嗜んでいる人は多かれ少なかれ多少の晩学を志しているのではないか。しかし、若い時に出来なかつた専門的な分野ともなると本格的で尊敬の念さえ覚える。ペン胼胼が出来るぐらいだから相当な事に取り組んでいるに違いない、と思うが昼夜を問わず励んでいるのだろう。季語に置かれた冬の雷は夏の雷と違い遠くで鳴る耳障りのよい音として聞こえてくる。雷がエールを送っているのだろう。

口よりも手話で言ひ訳冬の蠅

赤穂 久保 みどり

五月蠅と書いて「うるさい」と読む。夏の蠅を好む人は余りいないだろうし、本当にうるざりするほど嫌われるのが落ち。では、冬の蠅はどうか？梶井基次郎の小説「冬の蠅」では、蠅をよぼよぼ歩く、逃げない、飛べないと思えば飛ぶ、夏の不逞さもない、と前置きし本文に入っている。掲句の言ひ訳をしているのは世の男性であろうか、下手に口を開ければ語るに落ちることになると身振り手振りが多くなる。冬の蠅の季語が実的にを得ている。

# 神麓集

曲 水 沼田巴字

夜のみどり

北川孝子

貝雛の首をすくめるさむさかな  
峽も奥天の恵みや春田打つ  
一日の老の繰り言山笑ふ  
咲き満ちて母の如しや白椿  
曲水やわが胸中の詩一篇

たまゆらの灯のほつほつと花菜風  
随心院灯のかげ遠く蝶の来る  
建礼門松の勇姿に濃きみどり  
みどり寒控へ目といふ定めあり  
夜のみどり猫ゆっくりとうら返る

初場所 植村蘇星

マスク

直江裕子

己が身の心の洗濯初詣  
初読みの音読かろし道しるべ  
初場所や群雄割拠頭を擡げ  
加齢てふ挑む三年日記買ふ  
鹿の子衆和と輪ひろぐる初句会

十二月レシピの豆に紛れこむ  
マスクして覗き覗かれる錯覚  
ところ得て日の平らなるシクラメン  
重ね着のいちばん下にある思ひ  
駆けのぼる火の鳶ボール蹴りあげる

聞き役 高木晶子

聞き役はいつもの席に蕪蒸  
脈々と脈々と散る大銀杏  
柿なます時計の針を狂はせる  
柚子一つ足しいささかの礼心  
一仕事終へたる後の初時雨

葩の重たし 伊藤希眸

正月二日戦争の話などして  
餅のばし伸ばし戦後のお正月  
待つときはホットコーヒー友三人  
冬薔薇の葩はなの重たしもつれあふ  
遺伝子のどっかと立てる冬の百合

狭間 奥田筆子

キャベツむくオーロラ剥がす音させて  
雪原を一刀両断×マスケーキ  
鶴見しと誌して今日の一番組  
凍てゆるむ物の捨てどき来たやうに  
引力と浮力の狭間雪ばんば

雛の客 井上菜摘子

くしゃくしゃの昨日展げば白椿  
模様替への部屋のおごち冴返る  
恥づかしがりがいちばんに来て雛の客  
約束のためのリハビリ雛まつり  
すこやかに時代の端をすみれ草

# 神麓集

定形外 村田あを衣

落柿舎の月夜に拾ふ柿落葉  
柿落葉踏めば胸中万華鏡  
辛抱は芯の赫きに木守柿  
新海苔の香や潮風をしみ込ませ  
秋日和定形外の里便り

凍蝶に 山中志津子

コスモスよ最後の答はぶれないで  
初霜を踏みオペ室の記憶消す  
山茶花咲く術後の日数指折りて  
凍蝶に残る温みや旅終はる  
大三輪を巡る火の帯除夜詣

約束 井尻妙子

人日や書架の一書に届かぬ手  
年迎ふかたち無きもの握りしめ  
追ひかけてばかり寒暮の磴半ば  
春愁や横には振れぬベコ之首  
さくら咲く日の約束に真つ直ぐ

一念発起 鷺山珀眉

紅葉寺ピクトグラフの呼応して  
口紅の色かへて逢ふ十三夜  
顔見世やそれにつけても吉右衛門  
冬芽立つ一念発起の心得帖  
鷹化してシルクハットの玉手箱

持時間 亀井福恵

秋入り日いざ加速する持時間  
来し方や山粧へば命惜し  
雑草と言へど名を持ち紅葉す  
ひいよろよ鳶笛怖し次郎柿  
見せられぬ浮世ありけりうりんぼう

実千両 菊池和子

もうそこにめでたさのこゑ実千両  
てのひらに風をつかみて年の市  
イブの夜白き珊瑚の耳飾り  
柿紅葉池泉に散りて魚となれ  
散り紅葉みやび三条の風連れて

百周年 西村白杼

京鹿子の色変へぬ松百周年  
黄金の襖とら虎とら吠える  
除夜の空十秒経てば真っ新に  
目出度さのそこに来てゐる実万両  
余生とは風のまにまに冬すみれ

神のパレット 安田優歌

くれなゐの神のパレット紅葉谿  
然もありなむ美貌くづるる闇夜汁  
冬苺まぶたの闇をほころばす  
独り居のガラスの吐息冬の蝶  
柚子たわわ梢間に蒼き虚空かな

# 神麓集

麒麟の目 本郷公子

木枯にひたすら耐ふる麒麟の目  
オルガンの低音響く今朝の冬  
月冴ゆる埴輪の眼窩闇深し  
吊し柿奈良の茶粥の鏝朱椀  
父のごとき庭石に添ふ石路の花

夕照 佐藤千恵

小春日のソファ株価の続伸す  
つじつまの合はぬ話や根深汁  
晩秋の掃きぐせつきし竹ぼうき  
晩学や脱ぎしブーツのもたれ合ふ  
夕照や城へひと声寒鴉

峡の雪 石原孝人

静寂を闇に積み足す峡の雪  
石路咲くや枯山水の要石  
遠き日の光と影や枯木宿  
飛び石は着物の歩幅石路の花  
冬耕へ音なく落ちる夕日かな

笙の笛 山田和

笙の笛雲の切れ岡の初明り  
夕照の雪原の黙関ヶ原  
陶蛙跳ぶ構へなる露の臺  
上梓なる句集のリボン春の宵  
襟足の剃りあと清し初点前



# 京鹿子集

## 鈴鹿呂仁 選

### 水琴集

水鳥や山の便りは水に溶け

福知山 松山 潤子

浮寝鳥浮世の憂さを聞き流す

嵐山万の出入に眠り初む

京都 澤近 栄子

得しものも忘れしものも年を越す  
小春日をくまなく使ふ主婦ひと日  
冬木立秘めし捨て身の正義感

漢てふ脚立がほしい煤払ひ  
使ひ捨てカイロを一つお守りに  
腕白に巫女が手こずる七五三  
自己主張ワンプレートの冬苺

古曆一枚軽し日々重々し

岩佐 英子

それぞれの影を持ち寄り日向ぼこ

綿虫や晩年といふ不定形  
身の丈で生きて全う雪螢

奈良 福嶋 正一

去年今年言ひたき事の言へなくて  
年の夜の言霊ひらり裏返る

生れて意義無きものはなし雪螢  
半農で生きる山村麦を蒔く  
新海苔摘む当に解禁日の岬

葉牡丹の芯に闇あり命あり  
朽ちるまで化粧にはげむ落葉かな

福山 古本 もね

晩学のペン聃走る冬の雷  
冬紅葉みかへり弥陀の息深し

京都 塩見かず子

長き世に今は一人の炬燵守り  
無欲とは大きな欲や日向ぼこ

山茶花や妣の齢をかぞへをり  
温暖の冬の歓喜に世の沸けり

年の夜や樅木突く手へ息ひとつ  
顔見世や祇園四条の風変はる

深井 如水

りんごジャム女三代つつがなし  
口よりも手話で言ひ訳冬の蠅

終ひ弘法昭和の影を引いてをり

赤穂 久保みどり

白朮火を取り合ふ子らの闇やさし

浮き寝鳥尾羽を正せりエトランゼ  
診終へてぼつと雑談柿の秋

お裾分け頂いてより風邪心地  
最後まで句境深めて冬もみぢ

平成俳人叢書  
〔第四期〕 17

句集

# 紅梅地点

荻野千枝

## 一歩踏み込む個性の俳句

鈴鹿野風呂から「千枝」の俳号をもらったと聞く。  
本名の「五百枝」、住む処である「紅梅町」と  
あわせるとそこに基盤的な美しい茂りがある  
ように思える。……………豊田都峰（「序」より）